

博士學位論文審査要旨

2014年6月18日

論文題目： カンタベリのアンセルムスの神論

学位申請者： 斎藤 大樹

審査委員：

主査： 文学研究科 教授 中山 善樹

副査： 文学研究科 教授 宮庄 哲夫

副査： 神学研究科 教授 石川 立

要 旨：

アンセルムスの思想は中世哲学史において重要な位置を占めるにもかかわらず、従来我が国においては本格的な先行研究はきわめて僅かしか存在しなかった。著者はその卓越した思索力をもって果敢にも、アンセルムスの主要な作品を取り上げ、それらを主として「正直」(rectitudo) 概念に基づいて解釈することによって新しい統一的なアンセルムス像を提示することに成功している。これはアンセルムス研究において新しい局面を開くものであり、ここに本研究の意義を認めることができる。

第1章においては、真理論が論じられる。まず本研究の導入として正直概念が取り上げられ、それは諸事物が「為すべきこと」を為すことによって成立するとする。続いて創造概念と命題概念がこの正直概念に基づいて解釈される。神は神の内なる正直にしたがって諸事物を創造する。続いて命題の真理はそれが神の内なる正直に従って発せられる限りにおいて必然的に成立することが解釈される。

第2章においては、意志論が論じられる。まず善概念が取り上げられ、最高善である神によって創造されたこの世界における諸事物はすべて何らかの意味で善であることが論じられる。次に自由概念が取り上げられ、正直に基づいて意志される限りにおいて人間の意志は自存的であり、自由であることが解釈される。最後に幸福概念が取り上げられ、正直への意志によって導かれた人間は神に似るという究極的な幸福に至ることが可能であるとされる。

第3章においては、神認識論が論じられる。まず類似性の概念が取り上げられ、すべてを超越する神について語る際にはわれわれは被造物との類似性に基づいて語っていることが確認され、つぎに神の三一性について論じられる。これまではアンセルムスは主として「理性のみ」によって議論を進めてきたが、ここに至って、何故に神は三一的存在であることは、理性のみによっては論証されえず、信仰が必要とされることが述べられる。最後にアンセルムス思想を表す「信仰の知解」について論じられる。信仰によって根底において支えられた理性のみがその正直を獲得するのであり、適切な仕方でも神を探求することができると結論されている。

以上によって、本論文は、博士(哲学)(同志社大学)の学位論文として十分な価値を有するものと認められる。

総合試験結果の要旨

2014年6月18日

論文題目： カンタベリのアンセルムスの神論

学位申請者： 斎藤 大樹

審査委員：

主査： 文学研究科 教授 中山 善樹

副査： 文学研究科 教授 宮庄 哲夫

副査： 神学研究科 教授 石川 立

要 旨：

上記審査委員は、斎藤大樹氏に対する総合試験を2014年6月18日午後2時から約3時間実施した。

総合試験において学位申請者は、提出された論文の内容に関する口頭試問に対して適切に応答し、論文の意義とその研究水準の高さを明確に示すとともに、主題の背景となる哲学史的理解についても広範な専門知識を有していることも明らかにした。

また、語学試験（ラテン語、英語）においても学位申請者が研究上要求される読解力と運用力を十分に有することが確認された。

よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博士學位論文要旨

論文題目： カンタベリのアンセルムスの神論

氏名： 齋藤 大樹

要旨：

本論の主題はアンセルムスの神論である。極言してしまえば、アンセルムスの思想は全て神論であると言ってよい。一例をあげるならば『プロスロギオン』における神の存在論的証明をめぐる、アンセルムスは修道士ガウニロを「存在」概念について論争を行っているが、これはあくまでも「存在」としての神についての論争であった。アンセルムスにおいて「存在」はあくまでも神に基礎づけられるものであり、「存在」概念について「理性のみによって」明らかにすることは、神についての理解を深めることに他ならなかった。本論の目的はアンセルムスが様々な問題を通じて行った「理性のみによる」神の理解を通じて、アンセルムスが中世において問題とされた種々の問題について、独自の考察を行っていた事を明らかにすることである。

第一章においては真理論について主に『真理について』を手がかりにして考察される。アンセルムスの真理論の特徴は、単に論理的な問題として論じられるのみではなく、神との関わりの中で形而上学的な視点から論じられるところにある。

第一節では「正直」(rectitudo)について論じられる。この正直という概念はアンセルムスの思想全体に関わる概念であるが、諸々の事物が「為すべきこと」を為すことによって成立するある種の価値であるとされる。そしてこの正直が成立したとき、そのものは真なるあり方をしているのであり、真理であるとされるのである。アンセルムスはこのことを「命題の真理」、「意志の真理」等を扱う事によって考察している。ある命題が真であるとされるのは、その命題が伝えるべきことを伝えることによって正直が成立している場合であり、ある意志が真であるとされるのは、その意志が意志すべきことを意志することによって正直が成立する場合である。このように正直は論理的な「正しさ」に関わるのみならず、倫理的な「正しさ」にも関わる概念であり、それゆえに、アンセルムスの思想全体に関わる概念となりうるのである。

第二節では「創造」について論じられる。前節で明らかになったように「正直」とは諸々の事物が「為すべきこと」を為すことによって成立するものである。この事物の「為すべきこと」とは何か、という問題は、神の創造の問題を論じられる中で明らかになる。アンセルムスによれば神は質料的には無から、形相的には神自身によって全ての事物を創造したとされる。その際、神は自らの内なる本質を言い表すことによって事物を創造したとされ、それゆえに諸々の事物は神の内に自らの本質を有するとされるのである。そしてこの意味において事物は自らの「為すべきこと」を神によって規定されているとされる。すなわち事物の「為すべきこと」とは神の内なる本質に近づくことであるとされるのである。

第三節では「命題」について論じられる。アンセルムスはこの世界に存在する諸々の真理を「自然的なものの真理」と「非自然的なものの真理」とに分類し、前者を必然的に成立する真理であり、後者を偶有的に成立する真理であるとしている。例をあげるならば、炎は物を熱することによって「為すべきこと」を必然的に為すのであり、必然的に真なるあり方をしている。それに対し人間の意志は「為すべきこと」を為さないことも可能であり、したがって「意志の真理」は偶有的に成立する真理である。アンセルムスはこのように諸々の真理を分類した上で、「命題の真理」は「自然的なものの真理」に属すると主張するのである。その主張に従うならば、ある命題が真であるという事態は必然的に成立するものであるということになる。アンセルムスはこのことを「ある命題が真である」という場合、そこには「命題の真理」と「表示の真理」の二つの真理が成立していると考え。そして「命題の真理」は命題が命題として意味を持つ限りで、必然的に

成立する真理であり、それは命題が神の内なる正直に従って発せられているからであると述べるのである。このようにして「ある命題が真である」という事態すらも、アンセルムスにおいては神との関わりの中で理解されるのである。

第二章においては意志論について主に『選択の自由について』と『悪魔の墮落について』を手がかりにして考察される。アンセルムスの意志の自由をはじめとする諸々の問題について、アウグスティヌスの影響を受けながらも独自の考察を行っている。

第一節では「善」について論じられる。キリスト教において神は最善の存在とされるが、当然のことながらアンセルムスにおいても同様である。ただしアンセルムスはこのことも「理性のみによって」証明できると考えている。そして最高善たる神によって創造されたこの世界の事物は、何らかの意味において全て善であるとされる。それは悪を為すことが可能な人間の意志も例外ではないのである。

第二節では「自由」について論じられる。一般的に「罪を犯すことも、罪を犯さないことも可能な意志」の方が、「罪を犯すことのできない意志」よりも自由であると考えられるだろう。つまり選択肢の有無が「意志の自由」にとって重要であるという見方である。しかしアンセルムスは、神の自由という視点からこの見方を否定する。意志の自由にとって重要なのは、選択肢の有無ではなく、意志の自発性であると主張するのである。この意味において他のものから全く働きかけられることなく決定を行う神の意志は自由であるとされる。同様に内的な契機である「正直への意志」に基づいて意志決定を行う限りで、人間の意志もまた自発的であり、自由であるとされるのである。

第三節では「幸福」について論じられる。人間が意志決定を行うという事態を詳細に考察すると、道具としての意志が意志の性向によって働きかけられる事態であると考えられる。そしてこの意志の性向は「有益性への意志」と「正直への意志」の二種が存在するとされる。前者は自らにとって利益、幸福となることへ意志を導く性向であり、後者は自らの為すべきことへと意志を導く性向である。ただしアンセルムスにおいてこれらは互いに排他的なものではない。すなわち全ての「有益性への意志」が必ずしも「正直への意志」と一致するわけではないが、「正直への意志」は全て「有益性への意志」に一致するとされるのである。これは「正直」が神に基礎づけられる概念であり、「正直への意志」に導かれた人間は、神に似るという究極的な幸福に至ることが可能だからである。そしてこの神に似るという幸福は、有益性とも一致するものなのである。

第三章においては神認識論について主に『モノロギオン』を手がかりにして考察される。アンセルムスは「理性のみによって」可能な限り、神認識に近づこうと試みている。

第一節では「類似性」について論じられる。ここまでの議論についても言えることではあるが、アンセルムスは神と被造物に対して、共通の言葉を持って諸々の事柄を語っている。しかしその反面、アンセルムスは神と被造物を全く共通の意味を持った言葉で語ることは不可能であるとも述べている。なぜなら神は被造的世界を超越した存在だからである。これらをふまえアンセルムスは、神について語る際には、被造物との類似性に基づいて語っていると結論づける。つまり神の「存在」と被造物の存在は、表現としては同じであるが、意味は同じではない、と違って全く違うのでもない、と述べるのである。

第二節では「三一性」について論じられる。アンセルムスは神の三一性についても「理性のみによる」証明を試みる。しかしながらこの証明はある意味において不完全なものに終わっていることを認めざるを得ない。なぜならこの三一性についての証明においてはじめて、アンセルムスは理性の限界を認め、信仰の義務を説いているからである。すなわち神が三一的な存在であることは理性的に証明が可能である。しかしどのようにして神が三一的な存在として存在しているかという問題については、理性による証明は不可能であり、それは信仰の対象であると述べるのである。ここから理解されるのは、一見するとアンセルムスが理性による証明を超えた事柄に対し、信仰を解いているとする見方である。しかしこの見方が必ずしも正しいものではないことが次節

において明らかにされる。

第三節では「信仰の知解」について論じられる。「信仰の知解」とはアンセルムスの思想全体を最もよく表す言葉であるが、一般には「従来は信仰の対象となってきた事柄を理性によって証明する」という試みとして理解されている。このような理解は、理性によって証明できる事柄は可能な限り証明し、理性を超えた事柄は信仰の対象とする見方につながるものである。事実、アンセルムスは神の存在証明、神認識等を「理性のみによって」行い、理性を超えた三一性については信仰の義務を説いているからである。ここから理解されるのは、アンセルムスは信仰の領域と理性の領域を区別していたとする見方であろう。しかしこの見方は全くの誤解である。というのはアンセルムスにおいて「理性」の根底には、より深い「信仰」が働いているからである。神の存在証明、神認識はたしかに「理性のみによって」可能であるが、なぜ諸々の事物の中で「理性」のみがそのような証明を行うことができるのか、なぜ「理性」はそのような証明を行わなければならないのか、といった問題については「理性のみによって」説明できないことであった。しかしアンセルムスは「理性」のみが神の探求に向かうことが可能であること、探求に向かわなければならないことを強く確信していたのである。これこそがアンセルムスの「信仰」であり、このような「信仰」に支えられた「理性」による神の理解こそが、アンセルムスにおける「信仰の知解」の意味なのである。